伎譜古集之辯

始

俳諧古集辭

蛙飛こむ
水の音

芭蕉翁

大亀斎雨洲敬寫

我
東方今古滑稽人多矣蓋芭蕉翁者其詞宗
而可謂俳中之聖矣其言也微而婉其行也
卓犖放情丘壑天地以爲家古池之一詠殊
以爲會心之第一義詠造化之自然而不失
纖巧遂自爲一家於是海内言俳者風靡焉
若別爲黨爲異論之徒者實非正風也

美濃武儀郡大矢田村
梅村小三郎

羽州　閑涼亭荷笠謹題

古集之雜

序詞

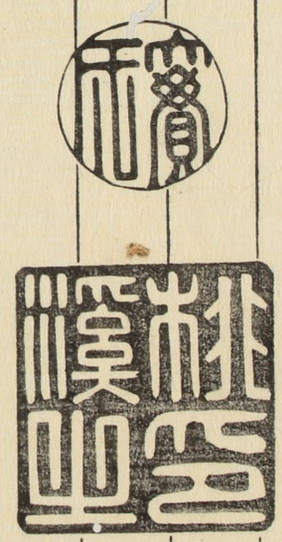
賈桃溪

我ヶ丈菊松子弱冠にして性あの古のうつ
清稽と好のり壯年乃て美濃紙み源
流〳〵一ゝゝゝ五升杯志仙之謂ゝゝ性く
ゝて舊識のゝく言下之学味力一四風を
肯ひうるゝより月ゝ雪ゝ紙墨ゝ物ゝ
て遠境力風景之少壮雪を面〳〵五里の
社会を指揮ゝゝゝ事ありとて志力
ゝみゝゝゝゝ紙墨紙ゝ為ゝ

てのちそんの系乃俳諧も殿より二國の世
乃衡をたゝくめるゝ已らさるゝ
ハうれゝるゝ和雅波よあゝぬゝ所
ゝゝゝ交るも嫌ゝれやひとりゝゝ
稼といふんてなて古間のたとるせり唱唱
雪裏治孔を食ふあのあるなりて　皇室又
雅風を創ゝの前ゝを含めるゝ廠を出ゝく
人ゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
元禄中の俳系を講せゝむゝ門人ゝゝの
後説を筆受せる物文庫ゝゝゝゝ出ゝる

系ゝゝゝ舊一百の遠ゝあゝゝせゝゝ
世紀を世ゝ公ゝてゝゝゝ行の光ゝゝ
ゝゝゝ復古の基ゝもゝんゝ報恩謝德ゝ
このゝゝやゝゝゝと餘慶ゝ海ゝあゝゝゝ
諫めゝゝゝれゝ謙遜ゝゝて敢て謗せゝゝ
ゝなゝゝ義ゝんてせゝゝも勇ゝれゝ
圖ゝのゝゝ君ゝ乃命ゝもまゝゝゝ乃
撞ゝゝゝゝ竊ゝ猶炭二系の翁を
いてゝ剞劂ゝ拾ゝ付りゝ新ゝゝ江湖の
誘君ゝ當ゝを許ゝて一閑のゝあゝゝれゝ

管見摸象の説を筆して亭ねて正中乃確
論を著し多くことをさあ〳〵八世孫のふて
るるるも豈その道よ忠ありとせさんやを
小子ゝ事ゝ志るりとして永
宮殿五葉丑少〳〵睦月日



雜古集大綱

地も謙譲の二字といひを延喜の御代は古今集と溫韻
して和哥の一脉とたちかりるとそさて甚石よりその
式と紫しして百韵をはるうゝ子白をはるねてあるゝ所を
是和るるみ隔てて文明長亨の頃もあんゝ事のち
幾許の宗匠ありて玄諧の巧ゝ人を驚すと造化の妙ゝ我
を樂されん義實いまゝ金かるといふるゝ〳〵ゝるる
昭代文物の盛るるいるりて宗祖芭蕉の翁伊賀ゝ產
〳〵武陵ゝ隱遁して漢土の史記ゝ邈文ある多分余曲の
俳諧をれゝ〳〵言偽ゝ人偽ゝ家ゝとるけてあゝゝるみ

西風を弘め行ふ其道てらや儒佛老莊の君愛と掛挑
て諸宗諷諫ふ一流をなれい者一世情の人和ようあ
きハ俳諧の名とをくく家しきふ風雅の教とをくし
をよ世三條の家訓ハこれ白馬を建門の大事ををよ
まして常門ふを見をんて年ふをいをる姿先情
後の教あれい新意の差別ハ明をを法ハよ新式
法傘のむをを改めた俳中の雅をいさをひ弦ひをよう
つ家月ふををり年ふをひををて遠きハ椎の葉乃糧を
はをを近きハ杏花の酒を授乃えて毛日の影を追ハ欠
といふををりしををををり度〳〵同好の藻河を集

連席の奇行を録して梓ふ繍を物今をを存せう殊ふ
百載の下古人の心肝を窺ひ給の翁を所以をを是
ををを至ふ貶あんやをれハ獅子蛮ハを毛を親炙して
いふも更ふ黄鶯五世の宗師ををも流幻変化ハ時ふ仕
をれををを必ずけふををををををを社中乃
風俗をををを古集ハ事もをををかを紀をををををを
ぬ必まありをををふの俳諧をきけハ姿先情後ハ論ふ乃
浮世めきをを語ふ流れてをを風雅の魅ををを淋
ををををれをんふををふ詞の古雅成
ををひて松風蕉月の神ハ化れとあをれ俳諧の名とをを

れ〜ゝとハたゝれゝんいつれも世道の大なる三際の
遺法ゝに差てゝといつゝ〜ゝこれ多ういうゝを称て今と
飾るの話ゝ也ゝ国酒とゝられて古来とよ
むゝ便あるもの除ゝよあるて多ゝ種に
為先情好の一論ハ一道興隆の基ゝて先哲の遺訓ゝ為
ゝれゝ所ゝいつもるゝ舊ゝゝれと勺ゝゝ方圓無垂乃形
あゝとのゝ為とんるゝ左無ゝもあれいいてやゝゝなんも
かゝるゝ〜しかゝ〜ゝもゝ〜附合ゝ除むゝ為ゝとて為
勺とゝる時ハ昭紀ゝて混ゝ〜ゝるゝれゝ附勺の類向
を来るゝと情も堂ゝとさゝるゝ〜勺他ハ又ゝを類向ゝる

事物の姿とゝのまゝよいひ出れゝ造化の自然ゝ小月ゝ為
ゝり尼人ゝの耳ゝも近ゝんゝゝを移易ゝゝ推思量と
いひ他者ゝ学ゝ為といひて学ゝ向ゝの一論ゝゝ〜ハ
今別ゝゝゝゝハ忽情附の形路ゝ為ゝん尤世論の左
踏ゝるゝ人の分為の無分別ゝて時人の無分為乃分
別ゝるも得と不ゝゝの源ゝ地ゝよれゝ二十年の禁毋
尼ゝてゝゝあて鼻ゝ為ゝと国ゝ人〜ゝて附人ゝの情と
いゝゝゝ第勺ゝ附勺と第ゝて好ゝ弁ゝ為ゝ合ゝゝ為
ゝて見ゝ為情ゝといゝゝゝ今〜一勺のゝ〜ゝゝゝき
ゝあゝゝ為ゝ為ゝ先ゝ好の左理ゝも信ゝゝゝんや他為勺ハ

物を感じて言を発するを感即念法とも言ふ即
姿を述べる一句のうちに法性と備はるべき性の先なるを
以て性の万物一情なるを知るべくの姿を通じての
情を生ずべき先なるをおのおのは一貫とも人しく情附
とつるまの昭然として飛めやすき法の理をもて
あ白のうちに学べるべきの己の情の物好と述べる人の耳
へハ学えぬかるべんかるべき法を好むとハ情と私乃
むの味あれらるべしまを疑べく温寛とも称ひるも
いう詩よ法を信ずと性と法の好るを聖と凡
るさしひうて世法と五倫の交も此一除と外るべく称ん

強柔諷諭の俳諧をもて天下の一助と称するも宜るべ哉
虚實を即信陽の古儀ふまて俳諧の羽翼ふり附合乃
形式を軽ふ次されば茫底の広實と無せ〳〵
ぬ何て所白の趣向と定むべき実と今日の急用なるを
為〳〵て実を通学方ふ〳〵徹底を理と明
らかべれば迷ひやすく二三子実と精神を厲まして
百錬千鍛せさんや初ひ〳〵の附合をなる白躰ふ
虚實あれば白素の広実あり〳〵四折八面を法りるせり
知も此白躰の広実と〳〵ハ先師名翁の法海ふもそ名
目と形〳〵説されば狂白得まる人もあるべ〳〵まハ文字ふ

[illegible]字實字のことき自然より動静のよりてあるといふなり
[illegible]自意の[illegible]といふ[illegible]周行[illegible]人の[illegible]
[illegible]変化の一巻と無[illegible]講[illegible]一[illegible]
かゝきより 独用 親疎 換骨 奪[illegible]傷の機変[illegible]
て[illegible]いひ[illegible]せれ[illegible]皆[illegible]の換[illegible]
[illegible]冊自[illegible]自然も[illegible]なり同[illegible]
[illegible]や一般[illegible]て越の[illegible]独の[illegible]附自の[illegible]
[illegible]しめ[illegible]は又[illegible]なの[illegible]常
[illegible]論[illegible]なん[illegible]とはき[illegible]とたの[illegible]
[illegible]の[illegible]初心の人[illegible]豈[illegible]

[illegible]虚を附[illegible]夢[illegible]虚[illegible]實[illegible]
[illegible]無[illegible]実[illegible]
実を凝[illegible]識より十論[illegible]口伝[illegible]虚實の[illegible]
[illegible]て[illegible]不到の形[illegible]とかゝ[illegible]説破[illegible]
未熟の族の[illegible]て却て道を[illegible]
めて[illegible]付[illegible]意を[illegible]古集の[illegible]融
通[illegible]かゝん彼の魔居士[illegible]遺言[illegible]所有と
空て[illegible]
変化[illegible]曲[illegible]中の変相[illegible]
一巻の配[illegible]附合の変化[illegible]

百変万化する所を識得せられた句の寓意深く古集カ
難不易越えがたく山川変化の所をのがれて変化
の骨肉といふ型大名の手越を猛法瓶と紙向ひ陸嶽系り
とひとの悪漢を持ちうるもまらあやうの変化うるあ
た変化の虎毛とうるるるる社中の附合とうるる
さい人倫の三白目といえい猛病神の尻馬にのりて未練の
う迷ふあやうあめうるを孤もなかりし山や川とも
指もはるるるは是淑なふ四いれんうして変化と
失ふとくい自己の拙撫う運ひる規矩の定れうるう
うう我書詩やふ知次の変こうるも以次はとあん
そ次たかうんうる思ふる差ぬものう縁めるるる
人いあるさめうるれるの弊もはる毛の変化と書物うて
越の金銭の倫所よりうるまうう紀行るうんいうるや
負享の古今秘もあうう風ぬくの迷るるるるきくの
さうひう人倫ふるるるるれる主誰獨うるいえ
たうひう人倫の時うるて人倫うさるる自他えるうう
倫情のたうひと考るる法制いやうるあ倫ふるるや
勾拙の事古来う教在せるものと多う筆てうるあるるるる
知るるむさい拙物といひ比奥といひ換骨う奪の右強うる
財所蒲茅の毒めるるいれも濃赤のさい法う效るうあるる毒

二句とかゝて後の一句とはけあらぬ詩の二句と合せて前の
一句とかゝるあり亦易とゝるべき句も越八れて二句一絶と
一変一章とゝ大同小異にして絶りきの絶句なるべ
八あるゝ次又俗体なるもの来る毎に同句多くゝ
多奪の手段又用あるゝとゝれや旦人間交際の為にも
山川草木の風色とても句やう一句まて指に和歌の
上下のあるゝとく詩格に記載のあるゝ球の第帝
物語の面影古詩古音の裁入とても正生の前にして用
ゝるゝと多掠とゝれゝ宮〻に着ゝ次あん中まも
然の句や甚詞古雅にして甚情いやゝかゝん今のきゝ

ゆゝとて片絶にいてよ春夏の抜ゝに月一日あるを
俗ゝとゝゝ月二日巳の用あるとゝるべゝさて雑を
絶ゝて他の季とはけ又此季より彼の季へゝつるのさひ
いゝれも変化の用なるべきを知てゝゝむゝとゝんあ不べゝ
例ゝ私情の祈ゝゝやいゝんとも月毎の詠といゝを
題嘲傍見と始ゝて掠ゝゝ紅葉を結ぶる横変の
自在をいゝも更又かゝゝほゝ変ゝ引あけて芸度と
必とせゝるものゝ昂古式の頭ゝん況やむゝの奇仙式を
二花三月の捉ゝるより初折の月毎かせゝゝれいそこ
不思議の化略多ゝ

句作る人風の自然と云ふ物の姿をよくのべる俗語平語
をもていひ述ることをさいく雅俗をわけあり
あしくあるを解しくることの句の姿をかきあつめて動し
難きを便あんとすることを詞花言葉の巧みよりて
句をもて作り物とせられを思ふ也七文字ばかりの外て
つれも移の用色を見あんある心地をせられされば花
をて實ふるく自然の風味を跡きより作て作ることを
故とて句のあるを所を諍つ二句の句代餘情といふる
風体の優劣をあしくるもたん斯のごく作意といひ
句作といひ作の密をるて翻轉をるを尾鍵をるを

口あしくもうしろをとこもて逐句かちをる俳諧をあるはれ
句をみを知をを友へく其愚の温和を慕ハさんや抜十論
を結句と先句と作りとしいるとを句の姿成
用るんて宮をへく句の用を再をかすてをを結ふ
をられ人をを特倒して用をもて趣向をるすれい
論をを句のいをるより別をひをの結句をを用
の詞ををりしをて一句をを仕をれの用を節餘情ををて
いるの論ををのをををををを
去嫌の事 天象降物降物のををひもあのくをを門部
あるをや相当をものををて混りく穿鑿ををを

ひとへに私情の混覆といふまを則ちて古集とつくる人い
かてか碑碣の罪と課せんとにさハ甚一隅と云ふべしハ
真享の式目に云へるごとく一座に多分遠俗の差人にも清濁と
雅と音訓に省きて吟哥の耳にぬきをそうれ
そ哥とたれとや
斯のごとき古碑遺稿の秘説ふり出ふる人を浪の糟粕
に愛をとゝめて学者と誇れるもまたいとをかしき
古集と誇るゝ儒者ゝいひ医門といひ画の伎芸
まるもまた世業にいとゝ喝ふるいりて学門の風雅
みゝをとゝろんやうと新学に入る人ゝのさゝ知も

いるみゝとゝれゝこれゝ何ゝのあるゝ中にも物に表裏侠
に義愛をもとゝんゝれゝ先学をまとゝと編き者ゝ
凡意の乃ゝ所ゝあゝ彩と論崖に育枝をもとめてそ
節と最彩霞に狙菊の熟選ゝるものいつれ後宮用
雅にて変化を風雲の行ゝるゝ音ゝ選ゝれゝ
亞くゝを領も文玉と碎き錦と裂く中ゝを面く
見ゝとに義ゝるものあゝるゝ弁論も想像に出れゝ面
をくるかし翁むこれゝの撰集を誇て越度を悔ゝ
ゝれゝいゝるゝ不ゝ次さて論をゝ姿情
の先師の勿論ゝゝ姿ゝゝして甚ゝ表ゝるものあて

まゝ情よりて請られを発ものせまりて変化の妙不可測の事
味の深長なるものゝ多くて今全く古顔の論をへさるあゝ
孫〻離れをるゝ〻痒とかゆ〻〻笑ひかん色をゝるゝ
二ゝのゝ蕩と窮めて甚窮まへらんことを求るの階
梯るゝくめゝ豈他の異事と悔ゝんや時時天明
あ川のゝ衣更ふのゝふ菊松ゝ杜哉遅百菴乃
南書ふ題す

俳諧古集之辨　始

羽陽　遅日菴　辨

猿蓑集

去来

蓑の羽も刷（カイツクロ）ひぬゝしぐれ

〻〻〻と人〻ぬゝを生ずる風情を形容一得うまぶ〻〻〻〻〻
いつも更之海先の乃理恵会の掛掛既味ゝ人〻〻　○刷ふ乃語ハ
人情よかりて初の字ハ初夏を遠ゝ次

一ぬき風の本ゝ気ふ生ゝ　芭蕉

風ゝおゝ〻ふの月花をあゝ〻ゝ
巣のあゝらゝゝ蓑の拍ゝゝ五ゝ　○木乃
蓑のあゝらゝゝ白作ゝ結蓑ゝ行り

殺引の鳥のゝぬゝ川ゝゝて　凡兆

人倫に能は旅許なり　○此撫子かへに其場の光景とゝのへて
いさゝか發句の用をもとめず気を案じもいはれ許ともいはん前句は又翔
かへしとみるにめづらしと感ずる姿ありて撫子さむ空の気味を請てとる
實ともいひ用ともいふべし　○虚實弁翔八更にして換骨に奪
も三句の離別を論くなかれは發句の運びに新らるものとても軽き
き所ありて以下の名目をも発するの次

ためしきを　おとしは篠張の弓　史邦

山畠かゝく男ともなふて肩に担てる所を見る即作場へ出るの
景に附たる軽き附句自然のなりをこゝろへし

まいら戸に蔦這かゝる宵の月　蕉

射出しておとす所を変化山流の破れ寺なるとこゝ由

人にもくれず名物の梨子　來

後我に心がなく作らせる席のかゝさの座に柑子の木の枝もとりて
みなりなるなまりりを岩鼻がいひしこそ此木なるらましろりとらん
いりそ面影を合めるなるし　○去来て句作を執しやすき
と思ふなす先の句を此句との換中なるまらんべし

書なくる墨絵おかしく秋くれて　邦

菓子盆の梨子に移りは　○蔦にさる所て世を渉りなる隠者なと
いりん見ては名を墨画にひきておかし

はきこゝろよきめりやすの足袋　兆

此三句自他いはれずとみても梨子の句に居を取とあまりに去嫌を
とらえて前をこのあしくてなさを新しく二句一体に作りて奪ひ移れり
見せと与奪の附と号く　○与奪は旧句によりて中二句の掛擲より出つ
て換骨はる種ありは法の字らなるに似たれと其差に行へきまつと無
なるにてて及ぶりとそ

何事も無言の内はしづかなり　来

若席と許とんで其足袋の用を兼ね勤行止観なるの久しく座せる
こゝを見り形式と覚れる句作のなりしをこゝろ也し

里見へそめて午乃貝ふく　兆

貝八午時を報ずるに　○比叡高雄などいふる静寂の地を下れる風情
なるん忽に浮世の音の耳に來る按排余情あり勤しきころ手際なる

更に正寺とかしめる里の一字妙なり

ふつれたる去年の杉こそあたゝかく　兆

家に八百の菁などの勝ゞるとみてふる趣といへるや○云説 古と牛字なるか麼滅して午字となれるか志るかたし只すむ里を牛か
かなと雑して詠んじる老の佐ぐさに賦らて居る以前といふことも由さあれば変化といひ執中に手柄あり

芙蓉の花はさらくと落る　邦

芙蓉なるよちるといひ又水を浴へる蓮なり○あるの物ぶいまうて酒池なとくるゆるる笑にあらじなん浄操のとう合せいとあるへし

吸物は先出来されしすいせん　蕉

水仙寺は海苔の名にして肥後の産物とて蓮生なる寺のまてなりともいふゆえ名おもしろきなん

三里あまりの道かゝえ来る　來

隙とりてゆくは遠くあるの意に執し先の字をとゞめていへり

この春も盧同か男居なりみて　邦

借るる者といひて茶屋の人と盧同になせり二句よくみの評とさるへし○盧同は唐の茶家の作者なり

さし木活きる月のおぼろ夜　兆

かれたさし木なる枝の芽ぶきし風情なるへし白きおぼろなるへし

苔ながら花に並ぶる手水鉢　蕉

花はさくも咲るなるや並るに比肩の意なり

ひとり寝もよき頃の夜寒に　来

評地の手入をまたざるとみて独居の寝を味といへるや

いちどきに二日の物も喰て置　兆

与奪なり○ひとりの寝に眼をつけて東方日備の旅をすれやかて男の風情に附なせり句作の影響をもとむへし

雲ちるさくらもみき　時の　小う路　邦

暁勇ある流されし人をとこうん変化あり

火ともしを　蛍れんかる　蛍の　来

幸ありあることありて用のたけるか

ほとゝきすなくなる　時仕舞ふう　蕉

寂寞ふかくに○かく鞍の白と鞍あるものの又他の蛍のようつせる
あのくもよりあるものを換骨らるの乃ち望まして赤銭の海あり　ゝ
て例をとゝ〜〜ゝ但換骨の子細八次よろへ

渡骨のよると知ることふかなきと　邦

時候のうつりゆくを病と数くさあるり

蹄をかりゝく　車川こむ　北

旅のなさけを送ればきゝうるとを迎ひみるあやうるうゝ男女も
ちよ多多ちん

うき人と根殻塩ようゝ　蕉

蹄やきゝよをうとひそうよみゝ心者とのくられんん媚
蹄やきゝよをうとひそうよみゝ心者とのくられんん媚
いろうるうゝ　志双帝物語の風流をうるれゝ○世俗賦去
を貴人ようるうゝ物ゝゝ多句を似れゝ等ゝ々れの別意よ
同きの理勿論ゝて越の食義ようるとゝそと換骨の所とん

いまや別れ　力刀　さゝ　あす　来

蕉人ようとかくゝもひ変る女の鎧へ捕まの向る風情ゝも面入るを
換骨せゝ多作ゝ但自他ゝ分ゝれんゝ所ゝいゝ

せりゝるよ　梯て　ゝゝ　かきちゝし　北

ようゝ奪ゝり　○貴女よ余波をあゝる本曽殿の面影ゝみといん

雪ひ　切ゝる　死ゝる　ひんよ　邦

此四句ふゝるゝいれて左右ゝも二句一体ゝれの人像の去姿といゝ度力
論ゝ多ゝ勇夫のゝゝとゝゝゝ和ゝゝるゝゝ句の二ゝゝハあつゝゝ又力和

[illegible]相八[illegible]の[illegible]

[illegible]もしんや　○二句一折八文字一変一章ともいふべし

加次郎通式なり

青天に[illegible]の月の[illegible]　来

湖水の秋は比良の[illegible]雨　蕉

[illegible]天の神[illegible]の句と[illegible]修羅の二句は急迫の情とあと

なり

栄の戸や蔦[illegible]盗れぬ[illegible]寄をうむ　邦

[illegible]句の[illegible]寄は[illegible]　○栄の戸は五文字なる

姿とうらはなり[illegible]文[illegible]と前せり

ぬのて[illegible]風乃夕[illegible]れ　北

かくのごとく[illegible]

押合て寝てこそ[illegible]仮枕　蕉

[illegible]の[illegible]情を[illegible]夕[illegible]の二字あり眠をはげて今まつりの出女房とも

[illegible]の仮枕とい[illegible]中の[illegible]句[illegible]ハ[illegible]まとりふるまきの句化[illegible]

とあて[illegible]句の[illegible]とおひめるやあ句[illegible]の沙汰もありとそ

きぬぎぬの[illegible]は[illegible]あまき空　来

[illegible]即[illegible]出[illegible]光[illegible]を[illegible]の[illegible]

○平[illegible]の[illegible]仮又天地之間猶囊籥乎[illegible]

古[illegible]

一かまくら　鰍　はらの窩乃[illegible]ふ　北

[illegible]鞘の火気のうつりと[illegible]物師の[illegible]迫るべき様句

[illegible]の風情とよろしん

枇杷乃蕾[illegible]木の芽[illegible]　邦

一本一叢[illegible]も姿とうるる信あり

○

凡兆

市中を猫の子ひやる夏の月

○その子風産を厭ふ話をあり

蕉翁あるとき猫を愛せざるを見て感ずる

あれ〳〵とつくしの子　芭蕉

暑さにあぶる白の余情ともいふべし月あるべき門涼をいとふ

さらん二句お然して新意あり

二番茶とりも果さぬ穂ゑ出て　去来

孫と舅とを異さの用をなり祝部と屋敷とを新に

庭うちはくうるめ一枚　兆

いそ〳〵対の酒に蕉翁の話を聞せり

世の節ハ銀も見えぬ不自由さよ　蕉

奥さまの白き本貫あるうるをや

たゞひとつ白き孫さし　来

旅宿の主人にてとひとつ三句自他の変化

草むらに蛙こハかる夕ぐれ　兆

換骨の附合り　○かの物さいふる小僕の風情をとゝめ侍り

しく変化自然なり詩句を

蔭の芽ゆりの芽　蕉

ゆりの芽にて物の形ゆりの芽

よ蕉翁にてあと女の新しられん姿をつゝ

道心のわたらい花のたむ時　来

蕉翁の句を解せるの新こゝろ安きとこゝ

えて詩形とす蕉翁の句二句一とまとて句の論

能登の七尾のみなとを作らき　兆

苔の句を識悔ゆるとて又ふたゝび他人の評あるとして加筆し
いくらか左所ゝゝの究竟とゝくゝ蓉も叶の俳句を集るのもひく
きて所多ゆゝ　○　夢のまゝと陽ゝく変化の用ゆゝて志ゝも案
情あり

奥の背ゝかゝる老を見て　蕉

京ゝ苦の人とさゝゝむ且ゝびあり魚の字ハ曰他と呼ゝるる乃
用と志ゝる角ゝ

待人いれゝ小侍門の鎰　来

眞向乃門番ゝ所多せり

立かゝり屏風を倒す女ゝた　北

自他ハ更ゝ逢情の情と物ゝる姿ゝの差別あり

湯殿ハ世ゝの簀ゝ乃ひゝき　蕉

其坊と湯ゝうといんさびゝ特ゝくゝ志ゝも乃紙ゝ洗ゝるの仕所あり
○　越ハ絵のゝうゝて居所を蹴ゝた

菌香の言と姿ゝ蔭ゝ夕あゝし　来

さびをゝゝゝ

僧やとさむく寺ゝかゝる糸　北

機嫌のゝゝと也を預ゝる秋の月　蕉

異様の句となゝゝて情態おゝゝゝす言を寄所ゝいあゝ
詩文ゝ対句あゝゝゝく一書のもやゝゝゝん　○　仲秋ゝ月乃
月ゝゝゝれハ夕嵐ゝ締ゝ

年ゝ一度乃地ゝゝゝゝゝや　来

それゝゝの句のゝゝゝ公役ゝゝれゝゝの世ゝを言ゝゝゝや

五六本生ゝゝ佐ゝゝる　滋（ミツノニリ）　北

地ゝゝゝゝの地水物の設ゝゝゝゝゝゆ仕一度の語ゝ出ゝ

[illegible]袋 [illegible]の [illegible] 蕉

遥さて〻早き田馬 [illegible]刀持 来

てりちゝ苔ふ水 [illegible] 兆

二句一躰とえて附 [illegible]

戸障子も遥かゝしの貴や〻き 蕉

堂味ゑて味ひあり

てん [illegible] いろ色 [illegible] 来

あ [illegible] 一応番椒 [illegible] 秋と [illegible]

こゝ〻と草鞋を [illegible] 月 [illegible] 兆

挑とえて蕃ゑる風情をいとゝや

蛍を [illegible] 初秋 蕉

後附あり老農のさ句 [illegible] ○ [illegible] 句より [illegible] 傲之

[illegible] 落 来

世句ふ [illegible] も [illegible] の一体とあれの去嫌と [illegible] 昂

[illegible] 句 [illegible] 仮三句吉物ハ三句 [illegible] の説あれとさ [illegible] 変化 [illegible]

[illegible] ○ 後附 [illegible] [illegible] 例と [illegible]

ゆ [illegible] て蓋のあ [illegible] 半 樋 兆

ふとの合ハ嵐の [illegible] 癖 [illegible] 蔑の [illegible]

紀 [illegible] 附られ

草庵を [illegible] 蕉

[illegible]

いのち蛭 [illegible] 撰集のさ [illegible] 来

[illegible]阿西行[illegible]の詠歌と見て所[illegible]

さ[illegible]と[illegible]る立[illegible]て　兆

与奪なり　○　苔白を小町の老情[illegible]めて君八[illegible]
花の色もうつろひ果し[illegible]と心あまりて詞[illegible]
其名をかりて補ひ[illegible]手法[illegible]

浮世のうてなうてなし小町[illegible]　蕉

二句一言にして白髪生涯の術あり

なに[illegible]と弼[illegible]も　涼[illegible]　来

[illegible]の[illegible][illegible]
[illegible]自他分明なり

お[illegible]き　板敷　兆

古遷の詩[illegible]風情[illegible]
[illegible]の[illegible]と[illegible]

[illegible]白面の詩[illegible]論[illegible]

[illegible]と風[illegible]遠[illegible]る花の[illegible]　蕉

白面の詩[illegible]と左遷の[illegible]
所[illegible]塩梅虚實の[illegible]換骨の附[illegible]

かな[illegible]　畳の移[illegible]さ　来

旅[illegible]

○　凡兆

庚汁桶の[illegible]

題合[illegible]雅俗あり
[illegible]

あふぎかすりて雪霜をもてる　秋　芭蕉

一ゝて深世界二ゝく新たに

新米をあらふ〳〵しき月新子　野水

夜々の斟酌より後附の三句一紙とせりさびを持て

○移後主人の家もらあるに明るの作侍るといふべきもやうなん

なゝくて蛙十九さまり　たき　去来

与奪して甚だ食客の多きをいとれと人倫とは思せり

子代弾へき物をさぐるみの白して　蕉

子むまをとるとる園饒一書て雲上の様稱ゝん明るみの真あ

ゝ新やり花おの白とゝんあふ凡るとゝいふ

蛍の舞る　たゝ〳〵　雪を如原　兆

小松の原ゝゝて雪をとゝりゝん○前句八文雅ゝて新し

後句八武備ゝて疎し

糸出して肱ゝ行まゝる春の朔　来

遠ゝゝもゝゝ人〳〵

摩耶ゝゝ根ゝ雪ゝ力かゝれる　水

ある人ゝ白の雪を疑ひ思ゝ世ゝれるの徳ゝ馬上ゝきゝと見

行けゝ以為ありてめゝるゝゝゝ越の無用ゝゝ

比甘次　○摩耶ゝ津の雪ゝて古蹟の地ゝり

ゆかめ〳〵ふかまゝて吟ハ風蓋る　兆

雪雲の光ゝゝて雪ゝゝ行ゝゝゝ月ゝゝ

さびあり

蛭の口(クイト)ふかをかきて乳ゝゝゝき　蕉

貴ゝゝ賤ゝゝ通せゝゝゝ

ものゝ行ゝゝふゝゝゝ体もゝ　水

[illegible]の二句一章〻 ○ 由良の左史の臺所あるところ〻

迎せるこゝろ殿よりの夕　来

[illegible]

金鈴と人のよろこぶ方のやうさ　蕉

我が寵倖のあるうちやむ時物のうつり一筋人の
ひくうすの執をもつる云語の表裏を表せるんやさハ憂ゝ
[illegible]
ハうてり ○ 金鈴と人と和せる座の世話なり

あれ風吾をきゝの音〻の月　兆

金鈴の語を移却して憂業の味ひをぬ望親に入るなり

町内の秋も更ゆく明やすき　来

[illegible]
かゝてひうせるを[illegible]の新意〻秋の字を
[illegible]

何〻ら月〻ろ〻ろ西[illegible]〻ろ〻ろ　水

町[illegible]を[illegible]一筋の時雨と[illegible]
て物〻人[illegible]一風情とあ[illegible]昂二句一[illegible]

花〻ちる月ハ西念の夜きて　蕉

[illegible]人時[illegible]人[illegible]の[illegible]果[illegible]をの色て定[illegible]
と[illegible]旦[illegible]の[illegible]

木曽の秋蕎麦の実もうれたく　兆

[illegible]の風流[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]麻衣あ[illegible]の[illegible]一首を[illegible]
[illegible]

かゝるやう〻山陰たゝふ四十雀　水

[illegible]

紫うす家のむ[illegible]をかゝ〻る　来

[illegible]陰の[illegible]山陰の[illegible]
木曽の[illegible]と[illegible]ハ[illegible]
[illegible]

みち空の あるかぎりなる 朱ちる風　兆

旅の 秋をこそ 思ひ　をく　蕉

さびしき 秋の 雨せり

きそ[illegible]き 女の 初恋も[illegible]くて　来

枕双帝ニ 清少納言 宮ニ 仕ひまつりて生昌ら家ニやとりしに
于定國の 娘ら ことをもて門の 秋きと 難たそ 五 五 ことめてくるや 蛇
[illegible]ひ[illegible]ら あ[illegible]ら[illegible]ら 羽ひ[illegible]れる ことあり かふ風流 [illegible]ん
[illegible]帝 [illegible]ら 兎 [illegible]帝の 詩 [illegible]

何 [illegible]ひ[illegible]ら 狼 [illegible]く　水

比奥の 所[illegible]て 二句一[illegible]

夕月 夜 罠の 雲[illegible]の は 廟 守る　蕉

六句を 雲[illegible]て 帝 [illegible]へき 風情 [illegible]

人も [illegible] あ[illegible]ら[illegible]ら 水　兆

閑伽僧 [illegible]や

[illegible]ら[illegible]ら 月 [illegible]ら[illegible]て [illegible]ん　水

罪伽 [illegible]の 雲 [illegible]て 男 [illegible]ら[illegible]ん ら 叶 二句 [illegible]と
考 [illegible]

又も 大事 [illegible] 鈴と [illegible]　来

月 [illegible]の 人 [illegible]ぎを [illegible] 僧 上 男 [illegible]

堤より 田の 雲やきて いさき [illegible]　兆

[illegible]うけの もや [illegible] 特せり

加茂の 風 [illegible]を [illegible] 社 [illegible]　蕉

そこ [illegible] 長堤 [illegible] 歯 [illegible]

物しりの尻声たかく名のりすて　来

此句ハ時宜の家居乃かゝることなく殺活あるくまかるよ
去年の夏の姿先の俳諧味ふへし名乗の端ハ古寺を摘るなん

雨のやどりの無常迅速　水

晴てうち行ことを見て一樹の陰のゑにしもあくまでく巳に
きぬくにハ乃れちることを観せし趣に傍ふせり

昼ねふる青鷺の身のたふとさよ　蕉

お越の斟酌より晴まで雲衲の面壁を比息しやうやさて人間の
五十年も一むかしの夢のごとくして世に佇むハるをとそらへる
草鳥の境界を羨み味ふるべし　これらの外に秃筆の中ならず
人をまきまあらかへんる人の自知をあらはして

しよろ〳〵水に藺のそよぐらん　兆

此句は鏡として附る其底生ずるの證となるべし

糸さくら腹いつはいに咲にけり　来

當門の正義論に曰花ハ桜にあらねバ花と称すまじき
とさしくを花にあらぬと云ん一義あり　さて発句花といふて
桜ある時あるひは花ならぬとせん三部とありて其句に
公式と図へしたりしかるにそこに秘訣の大事あれバ傳ふる人の
ことるに論ずるもよしあらんにかくの如く咲いに咲ける撰出
に此集の自讃とするなるべし

春は三月曙のそら　水

よりかへりし次

○

餞乙州東武行　芭蕉

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁

[illegible]

作の[illegible]

[illegible]

[illegible]　○芋菜と結ぶの生活のこと古今

[illegible]　乙列

雲雀なく小田と出もつ[illegible]　孫碩

岩まの[illegible]風情と[illegible]白辨の虚實と変あり[illegible]

新しきのことも道さとといん　○けやのつま捨やと稱して

ちらき祝ひて下されよりり　素男

染ハ浄茶にて似れる餅なり仏尖と用ひて祭る物なれん

社日なるとと稱ひしに[illegible]

片隅と虫蓋かくく[illegible]の月　加

[illegible]

二階の客をたれきれる秋　蕉

秋の一字が高潔しく到達一人の主ある余情あり[illegible]の姿

の[illegible]

めもる奈同屋の女[illegible]

放やるうつゝの旅ハ[illegible]せ　男

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]白仏の

[illegible]は微中[illegible]

稲の葉のひゝ力[illegible]　碩

平田杏[illegible]

[illegible]

[illegible]　蕉

[illegible]風情[illegible]の語と生の刈萱西行

[illegible]

内義[illegible]　加

愈なるうの長者なるんふり向る海眼下に見るうこと〳〵位来
家の〳〵もちんて此方と者せるやや

卯の刻の箕のもと芦ふ小西方　碩

○小西八氏なり　○芳白の語録と人
陣を布るる弁なり
かるもーうるぬ拵拵をうているうるん

すくまる松の静なるり　男

驃姚ら軍に似るり静の字ぬるり

萩の札をくきの札よりるるるる　劔

苑中をうあるく弁なるん

雀かるよる石舌なるの一聲　知月

拵を弄せるの拵拵と者白と知ていきるひあるる俗とそり尤
故るる弁の近きるり比奥せるる

懐にもとあるるむる秋の月　凡兆

兄もに者白と紀して男立の拵梁るる呼るもの多下に芳せるるるそ
ちひとるるや

汐さるまるぬかの海　浩〳〵　劔

海士や船人の下立まと家つ拵よるもるる

港の柄に立ちるる花のるれ　玄来

渡海を見る勇士のもやるるるる人きる　○ 立ちに対所あ拵と者拵
るれい全るれ世月花い塙剣るて白讃子和波るもる拵るん仕所法
ぬるるる俗るるらんん

灰まるきちるすかるる蒙の跡　兆

門かるるるひるみる供人の風情る拵を　○ 即ち芳ちるす
拵るり左時宜か跡るて男絲の変るいるる

春の日に仕舞てかるる經机　正秀

灰を立ちのるるるる紙角の変るり

[illegible] 来

敬て仏の仏[illegible]法華八講[illegible]詠の重さ[illegible]

汗ぬぐひ 蜘の[illegible] 紺の糸 半殘

いひ[illegible]屋の金[illegible]

あうれ[illegible]せ[illegible]き 雜カ下 土芳

[illegible]物と[illegible]せ[illegible]き[illegible]

大猟と思ひ[illegible]ぬ[illegible] 殘

[illegible]白と[illegible]

分ハぬれ帷の [illegible] 芳

[illegible]ちき女の[illegible]

換骨して[illegible]の論[illegible]

小刀の蛤刃なる 細工そこ 殘

波辺を細工と唱え蛤刃ハ毛を刈刀の姿なりとて義[illegible]

[illegible]

[illegible]人の細工箱と[illegible]白化寛[illegible]

[illegible] 大年カ夜 園風

[illegible] 猿雖

毎逢佳節倍思親と[illegible]

○源氏須磨の[illegible]

[illegible] 今[illegible] 殘

[illegible]人の形状を[illegible]

この[illegible]カ[illegible] 破扇 風

世界の[illegible]

[illegible]

仙人の人間の事を絵に画くこと

警油掛て月の原　雖

これらハ現に人態をあらはす事の差別いかもの更に情を姿に換骨せし所也仙人あとをくらまして却て多く情をあらはす例に書家の自在とやいんけ三白の余波の花也三白と同法

曉雪の陰ハちらせ　梅は散ひ　芳

家ごとに今ひとり晴き雪ふりて人靜まりし光景をいふ

深くハ雪ふりとくめんる　顔　風

こくんハ柔順の貌　○茶白の梅花に情を託して妖を去る女房をいふ　雪ハ梅の理不理を表あらはす　雪ハ梅用ふる

形ちるき　絵とおもふる　會津盆　嵐蘭

塗師の才子と称ふべし

うすゆきかゝる竹の　の刻下話　史邦

茅屋ちらん　○竹に雪を金茶花のうつりふるし

花ゆゑ　ことしの連も定らん　野水

此下話を雅人の奥ゆかしきこゝろ所や初歌の山乃吟行も心ゆかるゆゑをいふるゆゑ花錢の白乃白とをうつし

鶯の　ちるを　流る　春風　羽紅

女中に換てもゆゑ春をのふをいふ白作ハ古奇のこゝろ入なん

俳諧古集之抄　始

琢古亭

梅香